

山之内靖さんを悼む

中野 敏男

山之内靖さんが亡くなった。わたしの学問人生にあまりにも深く影響を及ぼした師のひとりであり、ある時は同じ思想課題と格闘した同志でもあるその人の死は、未だどうてい受けとめきれない痛手であり、その意味を語るにはなお嘔みしめる時間が足りない。

山之内さんが著書『現代社会の歴史的位相』を出されたのが1982年、それを追いかけるようにわたしが初めての著書『マックス・ウェーバーと現代』を出したのが83年だから、それらを機縁に生まれた最初の出会いはたぶん85年頃のことだったのだと思う。東京外国語大学のかつての西ヶ原キャンパスにあった山之内研究室で、その時わたしたちはまことに小さな社会理論の研究会をひとつ始めている。メンバーは他に、木前利秋さんと姜尚中さん。それ以外に広げようなどという話は誰からも出ず、つましく餃子や焼きそばなんかの出前を取って、それぞれ手持ちの材料によりひたすら議論するだけの不定期な研究会だったが、それがあれほど刺激的でわたしの研究者人生そのものを変えてしまう出来事になろうとは。それはまさに希有な僥倖と言える出会いであった。

マックス・ヴェーバーという関心の軸はあったにせよ、何か特定の課題について具体的な結論を急ごうとはしないその研究会の議論は、あちこちに飛びながら自ずと当代の社会理論を総ざらいする形となる。ごく少人数の会なのにそれぞれ一家言を持つ者たちの論議はつねに沸騰し、その中で山之内さんは、お一人だけやや年長であるのにいつも先頭で最新の理論状況に反応しつつ、先鋭な問題意識と強烈な自己主張で終始議論をリードしていた。わたしとの間でも、ヴェーバーの中にある「近代批判」の志向をどのように賦活させていくかという基本課題を共有しながら、山之内さんの『現代社会の歴史的位相』が「疎外論の再構成をめざして」を副題とし、わたしの『マックス・ウェーバーと現代』が「物象化としての合理化」を副題に持つというように、立場にはズレがあり議論にはいつも緊張が伴う。フォイエルバッハに学ぶ山之内さんの「人間的自然」という原認識と

その「疎外」という視角はつねに論争的だったし、現代社会を「システム」として捉える理解でも、それをパーソンズから見るかルーマンから見るかで立場は分かれた。それでも、「喧嘩しながら仲がいい」と評された山之内さんの言葉はその研究会の濃密な雰囲気をよく表現しており、わたし自身その中でどれだけ思考が鍛えられたか知れない。山之内さんの公正な学問態度とまっすぐな人柄がなければ、そのような場は決してありえなかった。

そんな社会理論領域での共同作業の展開から見るなら、山之内さん個人にとってもまた彼を中心に寄り集まる者たちにとっても大きな飛躍であったのは、そこで培われた社会理論が現実の歴史社会理解と結びつき、独自の理論的基礎を持つ現代史認識のひとつの立場にまとまっていったことだろう。山之内さんは当時、わたしたちの研究会とほぼ並行しつつ、東京外国語大学で伊豫谷登士翁さん、成田龍一さん、岩崎稔さんらと共に戦時体制の比較史的研究を進められており、この二つの共同作業が山之内さんその人によってひとつの歴史認識の立場に統合されたのである。それが「階級社会からシステム社会へ」という理論的見通しに立ついわゆる「総力戦体制論」であり、この立場は山之内さんの著書『システム社会の現代的位相』(1996年)にまとめられている。社会理論上の議論を共にしていた身として、この展開は文字通りめくるめくものであり、それによりわたし自身も日本の現代史をめぐる研究領域にいよいよ本格的に導かれたのは間違いない。歴史学の文献実証主義に違和を感じていたわたしは、それにより理論研究と歴史研究とを統合する道を教えられている。そんなリーダーとして、この頃の山之内さんの理論展開力は本当にすごかった。

もちろん、そうは言っても、歴史理論というのはひとつの「理念型」に他ならず、研究の進行にとってはつねにそのつどの作業仮説であらざるを得ないものだから、総力戦体制論とて、それが提起されたとたんすでに乗り越えられるべき運命にある。それは議論の内側にいた者から見ても驚く

8 山之内靖さんを悼む

ほどの反響を呼び、同様の見地に立つ個別研究もいろいろ出たが、であればこそまた厳しい批判にも曝されていて、わたし自身も主として植民地主義を視野に入れる観点からそれを繰り返し検討し、真剣にバージョンアップに取り組んできている。関東大震災からアジア太平洋戦争に続く時代を論じた拙著『詩歌と戦争』も、その作業の一環としてであった。それは、理論形成のある局面を共に歩んだわたしがすべき仕事であり、またその先達であった山之内さんへの敬意の表現でもあるから、わたしなりに感じた疑問にある程度見通しが与えられるまではさらにこだわって続けようと思っている。これも、山之内さんその人が開いた道に踏み入った者の定めだろう。

そしてそんな位置にいて特に訴えておきたいと思うのは、この総力戦体制論が、決して「戦時期」という過去の一時期についての解釈図式なのではなく、むしろ「戦時」と「戦後」とを貫いてひろく〈現代〉というこの時代をその社会の基礎から問う議論であるということだ。戦時期に集中して形を為した日本社会のあり方は、戦後にも清算されることなくその基底に生き残り、われわれの生と運命をなお律し続けている。東日本大震災と原発災害を経験して日本社会のあり方が根底的に問われているいま、日本の〈現代〉を再考させる総力戦体制論のこの視点は、あらためて顧みられるべき重要な実質を持っている。原発災害と共に「戦後日本」の破綻が見えている現在だからこそ、山之内さんの問題提起に今一度しっかり耳を傾けなければならないと思うのだ。

そう思うときわたしにとって悔いが残るのは、いつ頃からか山之内さんの仕事を引き継いでいくべき者たちの志向にさまざまな分岐が生じ、とりわけわたし自身が病気をしたこともあって、かつてのように山之内さんとじっくり意見交換しながら問題を考えるということが次第に難しくなっていくということがあった。それでも、山之内さんだったらどう考えるだろうかと想像し、それを指針にして思考を進めていくことがしばしばあったし、それを直接に確かめてみようと思いついたこともかなりある。晩年の山之内さんは、ヴェーバーにおける近代批判の志向を引き受けながら、それをさらにハイデッガーによる技術批判の思想に

まで降り立って深めていこうとされていたと聞いている。その議論は、ぜひとも受けとめておきたかった。しかし、それも叶わないままに、今はその希望そのものが断たれてしまっている。痛恨の極みである。

それでも、山之内さんの強烈な批判的意志を貫いたお仕事は重要な思想的成果をいくつも形として残してくれているし、わたし個人としても受けてきた学恩は計り知れず、感謝の思いは決して尽きることがない。

山之内さん、本当にありがとうございました。

(なかの としお・東京外国語大学大学院総合国際学研究院)